

告げ人

伊藤左千夫

青空文庫

雨が落ちたり日影ひかげがもれたり、降ふるとも降らぬとも定めさだのつかぬ、晩ばん秋しゅうの空そらもようである。いつのまにか風は、ぼったりなげて、人も気づかぬさまに、小雨こさめは足のろく降りだした。

もうかれこれ四時す過ぎ五時ごにもなるか、しずかにおだやかな忌い森もり忌い森もりのおちこち、遠とおくの人声とこ、ものの音ね、世よをへだてたるものの響ひびきにもにて、かすかにもやの底そこに聞こえる。近くあからさまな男女の話し声や子どもなの泣なき騒さわぐ声、のこぎりの音ねまき割わる音など、すべてがいかにもまた、まのろくおぼろかな色をおんで聞こえる。

ゆつたりとおちついたうちにも、村そんない内ここ戸こ々のけはいは、おの

がじしものせわしきありさまに見える。あす二十二日がこの村の

鎮守祭ちんじゆさい礼れいの日で、今夕こんゆうはその宵祭よいまつりであるからであろう。

源四郎げんしろうの家では、屋敷やしきの掃除そうじもあらかたかたづいたらしい。

長屋門ながやもんのまえにある、せんだんの木に二、三羽ぼのシギが実みを食く

いこぼしつ、しきりにキイキイと鳴なく。その声はもの考えする

人の神経しんけいをなやましそうな声であつた。ほうきめのついてる根ね

元もとの砂地すなちに、やや黄きばんだせんだんの実みが散ちり乱みだしてある。どう

いうものかこの光景こうけいは見る人にあわれな思いをおこさせた。

源四郎げんしろうはなお屋敷やしきのすみずみの木立こだちのなか垣根かきねのもとから、

朽くち葉ばやほこりのたぐいをはきだしては、物置ものおきのまえなる栗くりの

木のもとでそれを燃もやしている。雨になつたのでいつそうせいて

やつてるようすである。もとより湿しつけのある朽くち葉はに、小こ雨さめながら降ふつてるのだから、火ひ足あしはすこしも立たたない。ただプツプツとけむるばかり、煙けむりは茅ぼう屋おくのまわりにただようている。源四郎はそれにもかかわらず、どしどしといやがうえにごみをのせかける。火はときどき思いだしたように、パチパチと燃もえてはすぐ消きえてしまう。朽くち葉はのくさみを持った煙けむりはいよいよ立ち迷まようのである。源四郎は二十二、三の色いろ黒くろい丸まる顔がな男おだ。豆まめしぼりの手ぬぐいをほおかむりにして、歌もうたわずただ黙もくもく掃そう除じしている。

源四郎のしゆうとごは六十以上と見える。背せ高たかく顔かほの長いやさしそうな老ろう人じんだ。いま奥おくの間まの、一枚開ひらいた障しょう子じのこかげに、机つくえの上にそろばんをおいて、帳ちやうめん面めんを見ながら、パチパチと玉たま

をはじいてる。お台屋だいやのかたでは、源四郎の細君さいくんお政まさとまま母ははと若いわかやとい女おんなとの三人が、なにかまじめに話をしながら、まま母はははすの皮かわをはぎ、お政と女はつと豆腐とうふをこしらえてる。むろんあしたのごちそうを作つてるのである。

シギもいつしかせんだんを去さつて、庭にわ先さきの栗くりの木、柿かきの木に音のするほど雨も降りだした。にわかぐらにうす暗くらくなつて、日も暮くれそうである。めがねをはずして机つくえを立つた老人ろうじんは、

「源四郎……源四郎……雨がひどくなつたじゃねいか、もうやめにしたらどうだい」

「ハツ」

「源四郎や」

「ハツ」

源四郎は、ただハツハツと返事へんじをしながら、なおせつせと掃除そうじをやつてる。老人ろうじんは表座敷おもてざしきのいろりばたに正座せいざして、たばこをくゆらしながら門のほうを見てる。おもぎし父ちちにて、赤味あかみがちなお政まさは、かいがいしきたすきすがたにでてきて、いろりに火うつつを移す。鉄びんてつびんを自在じざいにかける。

「どうもほん降りぶになりましたね、おとつさん」

「うむ、せつかくの祭りまつも雨あめだない。えいやい休みやすみだから」

お政はそこをおりていったが、裏うらのほうからすぐ長女の七ななつになるのを連つれてきた。

「おじいさん、どうぞ柿かきをむいてやつてください。もう暗くらくなつ

たからね、おじいさんのそばにいるのだよ」

「おおまあや、この降るのにおまえどこに遊あそんでおつた。さあおじいさんとこへきな。あしたあ祭りまつだからな、みんなのじやまになつちやいけねい。いまに甘酒あまざけもできるぞ。うむ、柿かきのほうかえいか、よしよし」

松まつ女じよはおじいひぎの膝ひざにのつて柿かきを食くつてる。源四郎げんしろうもようや

く掃除そうじをやめたらしい。くまでやほうきやくわなどを長屋ながやのすみへかたづけている。そとは雨ふの降るのも見えぬほど暮くれてきた。

そのほの暗くらい長屋門ながやもんをくぐつて、見み知らぬ男おとこがふたりいそいそとはいつてくる。羽織はおりはもめんらしいが縞地しまじか無地むじかもわからぬ。ももひきぞうりばきのいでたち、ふたりは二十五、六ぐらい、に

よつたふうである。軒のきに近づくとふたりはひとしくかぶりものをとる。

「ごめんください」

「ごめんください」

「ハイ」

老人ろうじんは松女ひぎを膝ひざからおろしてちよつとむきなおる。はいつたふたりはおなじように老人ろうじんに会え積しやくした。老人はたつて敷しき物ものをふたりにすすめる。ふたりのものは腰こしもかけないで、おまえが口こうじよう上もうを申もうしてくれ、いやおまえがと、小聲こゑに押おし合あつてる。老人はもとより気軽きがるな人だから、

「おまえさんがたはどちらからでございますか」

「ハイ」

「ハイ」

ようやくのこと、すこし年としうえ上らしいほうの男が、顔のようすをつくろうて、あらたまつた口調くちように口上こうじようをのべる。

「わたくしどもは、その大富村おおとみむらからでましてございますが、ご親類しんるいの善右衛門ぜんえもんさんのおばさんが、けさそのなくなりましたものでございますから、告げ人つげびとにでましたしだいでございます。ハイいっとう一統いっとうからよろしくとのこと……」

「あ、さようでございましたか。それはそれは遠方えんぽうのところをご苦労くろうさまで……それはあのなくなつたは気違きちがいのことでしょうな」

「さようでございます。善右衛門さんからよろしくと申しまして
 ございます」

「まことにはやご苦労さまに存じます。あの気遣いも長ながとご
 迷惑をかけましたが、それでわたしも安心いたしました。まず
 どうぞおかけくださいまし」

この老人は応対のうまいというのが評判の人であったか
 ら、ふたりの使いがこの人にむかつての告げ人の口上はすこ
 ぶる大役であった。ふたりは道すがら話もせず、腹のうちで
 ねりにねってきたのである。どうやら見苦しくもなくあいさつが
 すんだので、ふたりは重荷をおろしたようである。気色のはり
 もゆるみ、腰のはりもゆるんで、たばこ入れに手がでる。ようや

く腰をかけて時候の話もでる。

平生多弁の老人はかえつて顔に不安沈鬱のくもりを宿し、

あいさつもものういさまである。その気違きちがいというはこの老人

の前妻ぜんさいなのだ。長女お政まさが十二のときにままったくの精神病

となつたのである。いろいろ療養りょうようをつくしたが、いかんとも

しようがなく、いささかの理由りゆうをもつて親里おやさとへ帰した。元来

は帰すべきでないものを帰したのであるから、もと悪人あくにんならぬ

老人は長く良りょうしん心の苦痛くつうにせめられた。そのみならず気違きちがい

はその後、里さとに帰つても里にごいず、こじきとなつて近村をふれ歩

いた。たちがたき因縁いんねんにつながる老人は、それがためまたあき

らめてもあきらめられぬ羞恥しゆうちの苦痛くつうをおいつつあつたのである。

このごろ老人もようやく忘れんとしつつありしをきようは耳新しく、その狂婦きやうふもなくなつたと告げられ、苦痛くつうの記憶きおくをことごとく胸先むなさきに呼びおこして、口にいうことのできないやな心持ちに胸がとぎされたのである。

その凶報きやうほうはおだやかなりし老人の胸を攪乱かくらんしたばかりでなく、宵祭よいまつりを祝いわうべき平和な家庭をもかきにごした。

大富おとみからの告げ人つびとと聞いたお政まさは手のものを投げだしてきた。懇切こんせつに使いの人の労ろうを感謝かんしゃしたうえに、こまごまと死者のうえについての話を聞こうとする。老人はお政がでたをさいわいに奥おくへはいつたままでてこない。まま母もそれを聞いてちよつとあいきつにでたぎり寄りつかない。源四郎は馬小屋うまごやにわらなどいれ

ている。

ひとりお政はたとえ氣違きちがいでもこじきでも、正しき生うみの母である。あたたかき乳房ちゅうさきに取りすがって十二のときまで保育ほいくを受け

た母である。心がけのよいかしこい女といわれているお政は、

「わたしはもうみえも外がいぶん聞きも考えませぬ。たとえあの氣違きちがいが

どのようなふうをしていようと、氣違きちがいですものしかたがありません。どんなになつていても、わたしはただこの世に一日も長く生かしておきたいと思うばかりであります。あの氣違きちがいの子がと人さまに笑われても、氣違きちがいの子にちがいないのですから、よんどころありません」

とお政まさこが、ことにふれての母たいに対する述じゆつ懐かいはいつでもきまつ

てるが、どうかすると、はじめは平氣へいきに笑いながら、氣違ちがいのう
わさをいうてても、いつのまにか過敏かびんに人のことばなどを氣にか
け、涙なみだを目に一ぱいにしたかとみるまに、抱だいてたわが子を邪じやけ
険けんにかきのけて、おいおい声を立てて泣なきだすようなことがあ
るのである。思いやりのないだれかれは、お政もすこしへんちき
だ、子どものふたりもある女が大声たてて泣なくのはあたりまえで
はないなどという。心あるしんせつな人らは氣違ちがいになった母よ
りも、お政のほうがかえってかわいそうだと、とも涙なみだにくれて同
情よを寄せてる。

お政は、きよう不意ふいにその母がなくなつたと聞かせられたので
ある。あしたは祭礼さいれいの日というので朝から家じゆう総そうがかりで

内外の取りかたづけやらふるまいの用意にたてきつてゐる際に、告げ人を受けたのである。お政はほとんど胸中が転倒している。まずなにごとよりもさきに、お政が胸に浮かぶのは、氣違いの母がどんなふうにしてなくなつたかという点である。

もしや野原か往来などで、行き倒れにでもなりやせまいか、人の知らぬまに死んでいたのでないかしら、それともすこしは早くようすがわかつて家のものの世話を受けてなくなつたのか、いろいろな想像が一時に胸にわきかえる。ひさしいあいだの氣違いであるから、家の人たちとてきつと満足には世話をしてくれなかつたろう。

とかくにこうひがんだ考えばかり思いだされ、顔はほてり、手

足はふるえ、お政はややとりのぼせの気味で、使いのものに始しじゆ終うのことを問といつめるのである。告げ人というものにたいしてのあしらいかたには、通つうれい例の習しゅうかん慣がある。お政はそれらのことにも気がつかずに、たすきを手にして立つたまま話を聞いている。使いのふたりがかわりがわりに話すところをまとめると、こうである。

「べつに病気というほどにも見えなかったけれど、この月はじまりのころから、たいへんおとなしくなつて、家のものいうことをよく聞きわけ、ほとんど外へでなかつた。家のひとたちのあてがうものをこころよく食くい飲のみして、なんのこともなく昨夜さくやまで過すごしてきたところ、けさは何時なんじになつても起きないから、はじ

めて不審をおこし、いろいろたずねてみるとようすがわるい、きゆうに医者にも見せたがまにあわなく、そのうちまもなく息を引き取った。あなたにお知らせするまもなかつたは残念ながら、まことにいい終わりでありました」

こう聞かせられて、お政はひととおりならずよろこんだ。見る見る顔色がおだやかになった。いつ何時どんなところで無残なくなりようをすることやらと、つねづねそればかりを苦に病んでたのだから、まことにいい終わりようでありましたと告げられて非常によろこんだ。お政のそぶりはよく使いのふたりを動かしした。

「それはほんとうのことでしょうね。それはほんとうでしょうね。

わたしもそれを聞いて安心しました」

「人ひとりなくなつたのを、けつこうというはずはないが、まあ、ああして終わりますれば、ハイ定命じやうみやうはいたしかたないとして、まずけつこうでござります、ハイ」

「まあ暗くらくなつたこと。かつてなことばかり申もうして、あかりもださずに、なんという無調法ぶちやうほうでしょう」

お政はきゆうにやとい女を呼よんで灯とう明みやうを命めいじ、自分は茶ちやの用意よういにかかった。しとしとと雨は降ふる、雨落あまおちの音が、ほちやりほちやりと落おちはじめた。使つかいの人らは、二里りの夜道を雨に降ふられては、と氣きづかうさまで、しきりに外そとをながめて、ささやいて

いる。

老人はせきばらいする声が奥おくに聞こえるが、寝ねてしまったらしく、ついにでてこなかった。源四郎はへつついのまえに腰こしをおろして馬のものをにているらしい。祖父そふにつき離はなされた松まつ女じよは祖母そぼにまつわって祖母そぼにしかられ、しくしくベそをかいて母の腰こしにまつわるのである。祖母はなにか気に入らぬことでもあるか、平へい生いぜいの手まめ口まめににず、夜道よみちを遠く帰るべき告つげ人びとにいつこうとんちやくせぬのである。やとい女もさしずがなければ手出しのしようもない。ただうろついている。源四郎はもとより悪気わるぎのある男ではない。祖母の態度たいどに不平ふへいがあるでもなく、お政の心しんち中ゆうを思いやる働きもない。

お政はただひとりで気をもんでるが、子どもには泣なきつかれる、

どうしてよいかわからぬ。やつと茶をだしたけれど、ひととおりしゆしよく酒食をさせねばならない告げ人を、まま母なる人がみようによそよそしているのでどうすることもできない。使いの人も食事だけはやって帰りたいと思うても、このありさまにごうをにやし、雨が降るのに夜おそくなつてはといいだして、いとまを告げるのである。

「一口さしあげないで、どうしてお帰し申すことができましょう。ご遠方えんぼうのお帰りをまことに申しわけが……」
とお政は早や声をくもらして、四苦八苦くくに気もみする。夫おつとにすこし客の相手あいてをしていくれと頼めば源四郎は「ウンウン」と返事へんじはしても、立ちそうにもせぬ。お政は泣く子をかげでしかりつけ、

背せにおうて膳ぜん立てをするのである。おちついてやるならばなんでもないことながら、心中わくらん惑乱しているお政の手には、ことがすこしも運ばない。

老人はなぜ寝ねてしまったか、源四郎はどう思っているのか。使いの人らは帰るにも帰れず、ぼんやりたばこを吸すうている。老人のせきする声と源四郎がときどきへついに燃もやす火の音のほか、声立てる人もない。かくていまこの一家は陰いん悪あくな空気にとざされているのである。

お政は長いあいだ苦くに思っていた狂母きやうぼが、きよう人なみに終わつたと聞いて、一どは胸むねなでおろして安心したもの、さすがに忘わすれがたき母の死を感じては、心こころさびしくもあり悲かなしくもある。

二十年あまりのあいだじやまにされ、やつかにされ、あらゆる
しゅうじょう醜せけん状を世間にさらした生きがいなき不幸ふこうな母と思いつめると、
 ありし世の狂母きょうぼの惨さんじょう状やわが身みの過去かこの悲痛ひつうやが、いちい
 ち記憶きおくから呼び起よこされるのである。

手に用をせねばならぬお政は、わきたぎつ涙なみだをぬぐうてもいら
 れぬ。ひややかなまま母、思いやりのない夫、家の人びとのあま
 りにすげなきしぶりを気づいては、お政は心しんちゆう中惑わくらん乱してほ
 とんど昏こんとう倒せんばかりに悲かなしい。ただ雨の夜道を遠く帰らねば
 ならない使いの人らに、気を配くばるはりあい、お政はわずかに自
 分うしなを失わずにいたのである。

お政は夢ゆめの心地こころちに心ばかりの酒しゅしよく食しょくをととのえてふたりに饗きやう

した。つねはけっして人をそらさぬ人ながら、ただ「どうぞ」と
いったままほとんど座にたえないさまである。家人のようすにい
くばくか不快を抱いた使いの人らも、お政の苦衷には同情
したもののか、こころよく飲食して早そうに立ち去った。

源四郎が、のろいからだとにぶい顔をだしたときには、使いの
人らは庭まででてしまった。

お政はずいぶん神経過敏に感情的な女であるけれど、ま
たそうとうに意志の力を持っている。たいていのことは胸のうち
に処理して外に圭角をあらわさない美質を持っている。今夜は
じつにこみいった感情が、せまい女の胸ににえくり返ったけ
れど、ともかくもじつと堪忍して、狂母の死を告げにきてく

れた人たちに、それほどに礼儀れいぎを失わなかった。

しかしながら、波瀾はらんを表ひょうめん面に見せないだけ、お政が内心の苦痛くつうは容易よういなわけのものでなかった。告げ人つびとを帰したお政は、いささか気もおちついたものの、おちついた思慮しりよが働くと、さらに別種べつしゆの波瀾はらんが胸にわく。叫哭きようこくしたくてたまらなかつたときに叫哭きようこくしえないで、叫哭きようこくすべき時期じきを経過けいこしたいまは、かなしい思いよりは、なさけなく腹立はらだたしさにのぼせてしまった。

「あんまりだ」

こう一言叫さけんだお政は、客きやくの飲のみ残のこした徳利とくりを右手にとつて、ちやわんを左手に、二はい飲み三ばい飲み、なお四はいをついだ。お政の顔は皮膚ひふがひきつって目がすわった。かたわらにいた松女

は、子どもながら母のただならぬようすを見て、火がついたように泣きなだした。

「おじいさんとこへいくんだ。おじいさんとこへいくんだ」

お政はわが子の泣くのも知らぬさまに、四はいを飲みつくし、なお五はいをつごととする。源四郎も老人も松女のさけび泣きなにおどろいてでてきた。源四郎はお政の手から酒をうばって、

「こら、なにをするんだ」

「なにもしやしません。お酒をいただいでるんです」

「酒を飲むんだって、そんな乱暴らんぼうに飲んでどうする」

「あんまりです、あんまりです」

お政は泣き声にこうさけんでうつふしてしまった。松女は祖父そふ

にすがりついて、

「おかあさんをだましておくれよ、おかあさんをだましておくれよ」

老人は松女をすかして引き寄せながら、

「政やおまえの胸むねをおれはよく知っている。おまえの腹はら立ちにすこしも無理むりはないのだから、おまえの胸はおれがよく知しってるから、となりの家へでもいってな、となりのおかあさんにおまえの胸をよく聞いてもらえよ。そうすりや気もおちついてくるだろう。なにもかかすんでしまったことじゃないか。おまえがこれまで、よく堪かん忍にんしてきてくれたことはおれがちゃんと知しってるのだから、なあ政まさ……えいかわかったろう。源四郎げんしろう、おまえ、とな

りへつれていつて頼たのんでくれ」

老人ろうじんは、なにごとものみこんでいるから、お政の心しんちゆう中を察さつし、涙なみだを浮うかべてむすめをさとすのである。

源四郎はわが妻つまながら、お政の悲嘆ひたんをどうすることもできなかつた。

「おとうさんもああいうのだから、黙だまつてくれ。おまえの心はおれだつて知つてるよ。さあ、おとうさんがいうのだから、となりの家へすこしいつておれよ。おれがいつしよにいくから、えい、お政……」

お政は源四郎のことばには答えもせず、わずかに頭を起こし、「おとうさん、もう心配しないでください。となりへいかんでも

ようございます。わたし、しばらく休ませてもらえばようござい
ます」

「そうか、そんならおまえのすきにしてくれや。それじゃ松まつや、
おかあさんはね、すこし休むちから、さあ甘あま甘あまにしようよ」

老人はそのままお台屋だいやへはいる。源四郎は妻つまをうながして納戸なんど
へ送りやった。

まま母ははじめから口もださず手もださず、きわめて冷然れいぜんた
るものであった。老人は老妻ろうさいの冷淡れいたんなるそぶりにつき、二言ごこと
三言ごことなじるような小言ごことをいうたに對したい、

「わたしやなにもかまいやしません。お政がひとりで腹はらをたつて
るのは、わたしにもしようがありませんもの」

まま母のものいいは、齒はにももののはさまつてるような心持ちに
 聞こえるけれど、やさしい老人はそのうえ追ついきゆう 及つもしなかつた。
 源四郎はもちろん妻のしぶりに同どうじよう情じようしているが、さりとても
 ま母の冷れいたん淡たんに憤ふんがい慨がいするでもない。黙だまつて酒を飲み、ものを食
 つている。雨はいよいよ降りが強くなつてきたらしい。

翌よくじつ日は意外いがいな好こうてんき天氣てんきで、シギが朝早くから例れいのせんだんの
 木なに鳴ないている。

二十年まえに離別りべつした人でこの家の人ではないけれど、現げんざい在ざい
 お政の母である以上は、祭まつりは遠えんりよ慮りよしたほうがよかろうと老ろうじ
 人んのさしらずで、忌きちゆう中ちゆうの札ふだを門かどにはつた。ものごとくお政は早
 くも昨夜のことは自分の胸ひとつにおさめてしまえばなにごとくも

なくすむことと悟さとつて、朝起きる早そうそう色をやわらげて、両りょうし
 親んにあいさつし昨夜の無調法ぶちようほうをわび、そのまま母の喪もにおも
 むいた。そうして思うさまにその狂母きやうぼを泣ないた。泣いて泣きぬ
 いた。

親戚しんせきのものは、みな氣違いが死んでくれてやれよかつたとい
 つてるなかで、お政がひとり泣いておつた。お政が心しん底そこをしん
 に解かいした人は、お政の父ひとりくらいであつたらうけれど、それ
 でもだれいうとなく、お政さんはかしこい女だという評ひやう判ばんが
 立つた。

青空文庫情報

底本：「野菊の墓」ジュニア版日本文学名作選、偕成社

1964（昭和39）年10月1刷

1984（昭和59）年10月44刷

初出：「ホト、ギス 第十二卷第三號」

1908（明治41）年12月1日

※表題は底本では、「告《つ》げ人《びと》」となっています。

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

入力：高瀬竜一

校正：岡村和彦

2016年7月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

告げ人

伊藤左千夫

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>